

工学離れを跳ね返そうと、技術者の魅力を高める努力を続けてきたが、効果はさっぱりである。医学部は相変わらず高い競争率を誇っているのに、工学系学部は競争率最低グループの常連になった。人間の健康に責任を持つ医者と、人工物の安全に責任を持つ技術者は、対象こそ違え社会に対する責任の重さに違いはない。それほどやり甲斐のある仕事なのに、どうしてその魅力が伝わらないのか、その理由をいろいろ考える。

ひとつ思い当たることがある。健康に責任を持つものは、医者だけでなく看護師、臨床技士など、医療従事者全体である。そしてそれぞれが、固有の資格に裏付けられた明確な職種となっている。いっぽう安全で信頼性の高い人工物を作り、それを管理運用する人たちも、研究開発者から設計者、生産企画管理者、技能者、保守サービスマンなどに至るまで多種多様である。

医者と技術者

大橋 秀雄

世の中では、それらをひっくるめて技術者といっている。その中には、ノーベル賞受賞者もいれば技能五輪金メダリストもいる。

医学部にチャレンジするのは、医師という明確な職種が見えているからである。では、工学系学部にはチャレンジする

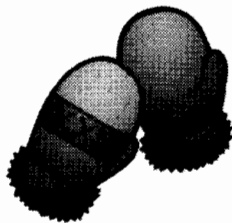
若者にどんな職種が見えているのか？ 大学側は盛んに技術者の魅力を謳うが、技術者の中身が茫漠としていてピントが定まらない。これでは、若者が将来に描く職業像の中に入りようがない。

日本でも、かつて技術者を技師、技手、工手の三職種に分ける時代もあったが、戦後は消えてしまった。技師を目指す方が、技術者を目指すよりもまだピントが合っている。

技術の世界で、医者に対応するもの、すなわち価値の本質が判断力にある職種の名前を決めてアピールすることが、失地回復の第一歩と思える。

(工学院大学 理事長)

Essay



随

筆